ふるさと安曇野
きのう きょう あした

No. 20　2019.8.27

# 絹の道

## ～養われる蚕・自養する蚕～

### はじめに

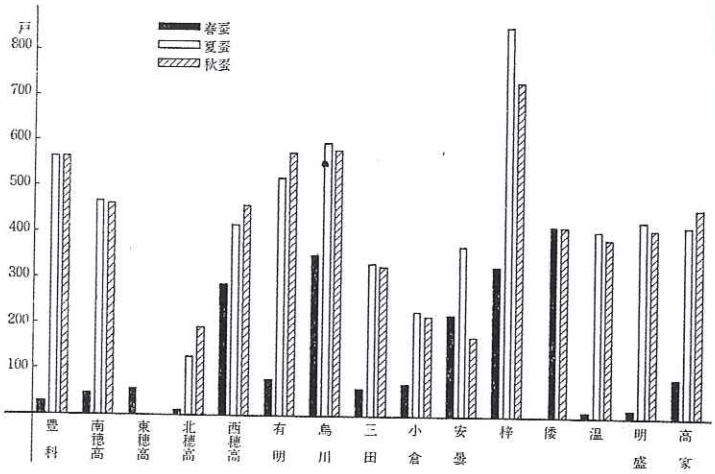
安曇野市域では、江戸時代の天明３（1783）年に松本藩から桑を植えることが奨励され、寛政３（1791）年には各家の妻たるものは蚕を飼い、機を織ることという趣旨の申達が各戸の婦女に向けて出された。藩は桑苗を下付して田畑の畔、新開地等ともかく空いている地所には桑を植えさせている。当初は草と間違えられて切り取られたり馬に踏み荒らされたりしたので、豊科の寺所では養蚕の時期になると夜回りをさせて保護したという。こうした保護のおかげで文化年間の下鳥羽村では機織りと蚕飼いが女の作間稼ぎとして『郷鑑』に揚げられるまでになった。

蚕種は最初上田あたりの種を用いていたというが、蛹が大きい（ということは繭も大きい）美濃の種類を島々村で仕入れて普及させ、安政年間には一段と養蚕が普及した。江戸末期から明治初期には安曇野市域でも蚕種の生産が始まり、蚕種の販売路も次第に拡大させていった。安曇野の蚕種は丈夫でいい繭が取れるとの評価を得たが、それは、烏川流域や梓川流域にいくつか利用できる風穴があって冷蔵庫代わりになり、種が保存できたからであった。くわえて、よい桑の取れる地域もあり、松本からボテを背負って大糸線に乗り、桑を飼いに来るほどであった。

岩原の風穴

風穴内部　年間を通して温度が一定

こうして明治初期から昭和初期まで養蚕の盛んな時期を迎えたが1930年代の世界恐慌は、繭値の値下がりを招き、借金だけが残ったという養蚕農家もあらわれた。養蚕は農家にとって稲作の収入を補う大切な副業でもあったから、繭値の暴落は農家にとって大打撃で、早々に養蚕をやめてしまう農家も出てきた。そのうえ、第二次世界大戦の激化により、男手は応召され様々な作業が銃後を守る女たちの肩にかかってきた。更に国は食糧増産のために桑をこいでイモやカボチャなどを作ることを奨励したので、養蚕は必定衰退の一途をたどった。




春夏秋蚕別飼育戸数（大正５年）
『南安曇郡誌 ３巻上』

平成10年代、最後の養蚕農家が蚕を飼わなくなり、安曇野市内の養蚕に終わりを告げた。

## Ⅰ　家蚕をめぐる様々な伝えと習俗

### １．養蚕起源

日本で蚕が飼われ始めたのはいつごろか定かではない。が、『魏志』「倭人伝」（晋の陳寿―233～297年が選択した『三国志』のうちのひとつ。）には、倭人は「倭人在帯方東南大海之中」にあって、人々は以下のような暮らしぶりをしていたという（原文の書き下しは展示参照）。

男子は大小の区別なく、みな顔や体に入れ墨をする。むかしからこのかた、その使者が中国にいくと、みずから大夫（卿の下、士の上の位）と称する。夏后少康（夏第６代中興の主）の子が、会稽（浙江省紹興）に封ぜられ、髪を断ち体に入れ墨をして蛟竜（こうりゅう）の害を避け（ていたように）、いま倭の水人は、好んで潜って魚や蛤を捕え、体に入れ墨をして（魔除けをし）大魚や水鳥の危害をはらう。のちに入れ墨は飾りとなる。諸国の入れ墨はおのおの異なり、あるいは左にあるいは右に、あるいは大きく、あるいは小さく、身分の上下によって差がある。その道理を計ってみると、ちょうど会稽の東冶（福建閩侯（びんこう））の東にあたる。その風俗は淫らではない。男子はみな髪はみずら、木綿を頭にかけ（頭に巻き付け）、きものは横幅の広いもの、ただ束ねて連ね、縫いつけることはない。婦人は、髪は束髪のたぐいで、単衣のようなものを作り、中央に穴をあけ、頭を突っ込んで着ている。いね・いちび・あさをうえ、蚕をかい、糸をつむぎ、細紵（いちび、ほそあさの布）・縑（かとりぎぬ・きぬ）・緜（真綿）を生産する。その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲（こまがらす・かささぎ）はいない。

（石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫　1998年９月による）

註：布目順郎『養蚕の起源と古代絹』によれば、弥生時代の遺跡からの出土品から絹が出ているところから、すでに弥生時代には養蚕が行われていたであろう、という。木綿も楮の皮を叩いて織った、栲（たえ）説を主張している。これを見ると、すでに貫頭衣のようなものを着て、顔や手に入れ墨をしていたことがわかる（想定展示参照）。庶民までは絹をまとうことはできなかっただろうが、すでに蚕が飼われていたことが知れる。布目順郎『養蚕の起源と古代絹』によれば、弥生時代の遺跡からの出土品（刀子のさや）に絹が使われていることから、すでに弥生時代には養蚕が行われていたであろう。

## 2．神が生み出した蚕

『古事記』では大気津比賣神が五穀とともに蚕を生み出す。神の国を追われた須佐之男命が大気津比賣神のところに立ち寄って食物を乞う。と、大気津比賣神は目鼻口尻から食物を出してご馳走するが、それを覗き見た須佐之男命は汚らわしいものをくれたと怒り、大気津比賣神を殺してしまう。すると大気津比賣神の各所から穀物や蚕が生じたので、神産巣日御祖命はこれらを種とした、という話が伝わっている。

「爾大気津比賣、目鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、須佐之男命、立伺其態、為穢汚而奉進、乃殺其大気津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蚕、於二目生稲種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麦、於尻生大豆。故之神産巣日御祖命、令取茲、成種。」

（『古事記祝詞』日本古典文学大系　岩波書店　1955年6月による）

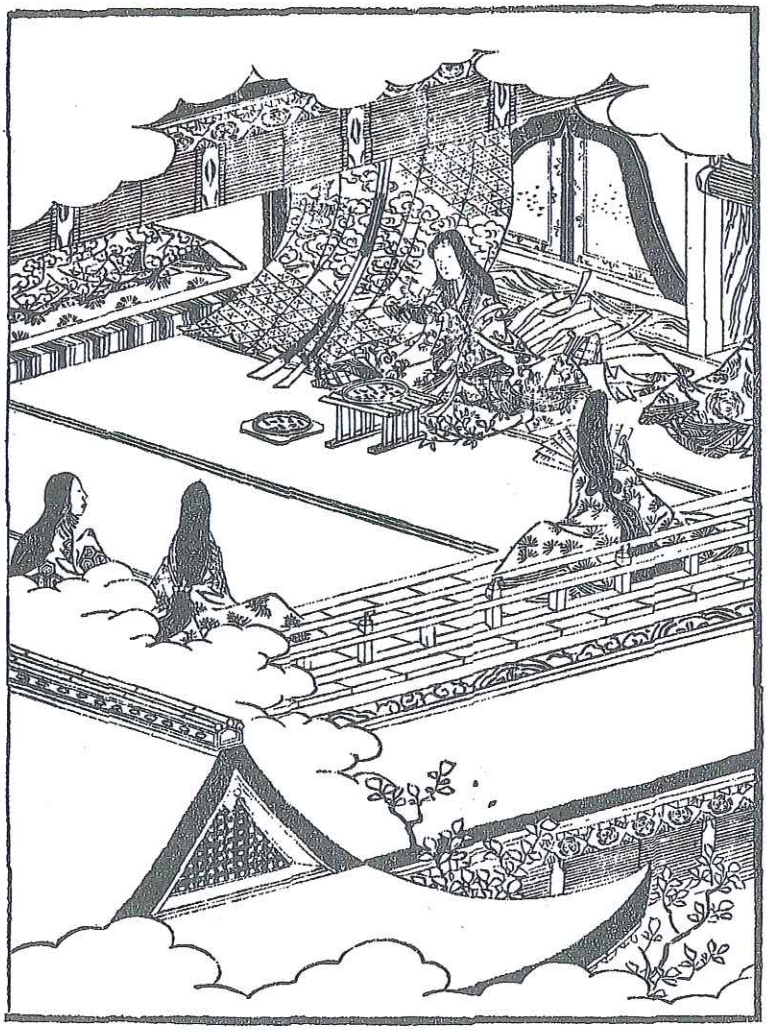
神話の時代からモノを生み出すのは当然のことながら女神であった。

こうして生み出されたという蚕は、朝鮮から来た奴理能美というもののところに飼われており、一度為匐虫、一度為鼓、一度為飛鳥、有変三色之奇虫であるという特色をも記述されている。

これが『日本書紀』になると、大気津比賣神が保食神に変わるが、内容は『古事記』とほぼ同じである。神によって生み出された蚕は、代々の天皇・皇后によって次第に普及・定着が図られていく。特に雄略天皇は養蚕の普及に力をいれ、皇后に命じて桑を植え蚕を飼うことを奨励する。皇后は自ら蚕に桑を与える親桑を始めたという。以来、養蚕は女性の仕事として女性たちは蚕の飼育から製糸・織物まで担当することになる。織物の技術は、応神天皇14年春2月韓国から真毛津という女性が機を織る技術をもって、日本に渡ってきてその技術の普及につとめたという記述がみられる。

『日本書紀』雄略天皇に関わる記述は、『養蚕秘録』の中には、内容が図像化されている。しかし、この時代まだ十二単はなかったはずで、江戸期の人々が日本書紀の時代の人々の着るものをどのように認識していたかもよく分かる図像である。

当時の天皇と皇后の役割分担は現在も受け継がれて、養蚕は紅葉山ご養蚕所で皇后の手によって行われている。

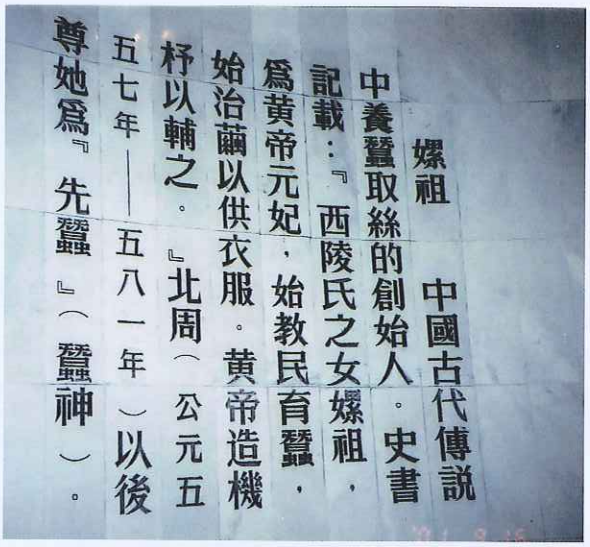


第二十二代雄略天皇の皇后が、手ずから桑の葉で蚕を養育されたことが『日本書紀』に出ている。

農書全集に入れられた雄略天皇と皇后の親桑『養蚕秘録』より

## コラム1　中国起源の蚕神

中国ではすでに黄帝（中国を統治した伝説上の皇帝。紀元前2510年～紀元前2448年）の時代、黄帝が后である青陵（せいりょう）氏の娘（螺祖）に親蚕をするよう勧め、それから皇帝の后は養蚕をするようになった。中国では青陵氏の娘螺祖を蚕神としてまつっている。中国浙江省杭州や蘇州の博物館のエントランスには、螺祖（らそ）が親蚕をしている絵や文章が飾られている。




蘇州　シルク博物館エントランス

杭州市博物館エントランス

## コラム2　韓国の蚕神

韓国でも蚕神を中国の青陵氏女螺祖（せいりょうしのむすめらそ）を蚕神としてまつっている。韓国でも李王朝時代、皇后が親蚕（しんさん）を行い、毎年蚕神を祀る親蚕礼をおこなっていた。しかし、日程時代にそれが禁止され、2004年韓国文化院によって復元された後、その後は毎年行われている。王妃役・女官役は女優たちに依頼するため、見学者が大勢押しかける。外国からの観光客も増えている。

先蚕壇址（ソンチャムダンジ）

復元された親蚕礼

先蚕壇址には壇址に続く参道の両側に桑の樹が植えられ、大きく育っているが、もともとの壇址は景福宮近くにあったといわれている。

## 3．もう一つの養蚕起源説話 ～金色姫物語（天竺霖異大王の娘）～

もう一つの養蚕起源説話として、以下のような天竺霖異大王の娘金色姫の話が伝わっている。

天竺の霖異大王の娘金色姫は、病にかかった母を亡くし、父の王が新たな母親を娶った。后は金色姫を疎んじ亡き者にしようと獅子がすむ谷に姫を捨てさせる。しかし、姫は獅子に殺されず獅子に養われて無事にいる。そこで后は今度は鷹がすむ山に姫を捨てるよう命じる。姫は鷹の山に捨てられるが、今回もまた鷹に養われて無事にいる。怒った后は庭に穴を掘って姫を生き埋めにするが、王にみつかり后は咎められる。しかし、姫の命の危険を感じた王は、姫を桑の木のうつぼ舟にのせて海に流す。姫のうつぼ舟は大海原を漂い、常陸の国の小貝浜に到着する。姫の舟を見つけた権太夫が姫を家に連れ帰り、妻とともに育てようとするが、育たず姫はみまかってしまう。

姫は天に昇っていくが、しばらくすると不思議なことに天から小さな虫が降ってきて桑の木にその虫がつく。権太夫夫妻はその虫を姫と思って育てる。と、虫は桑の葉を食べては休み、食べては休みして大きくなり、最後に白い美しい繭となる。

『養蚕秘録』の表紙には、金色姫の苦労を著わす獅子（右下）、鷹（左上）、フネ（左下）、ニワ（右上）の画が象徴的に描かれている。

養蚕用語の中に一眠から四眠をシシヤスミ、タカヤスミ、ニワヤスミ、フナヤスミという呼び方をする地域が多いが、この呼び名は、前述の金色姫の苦難を伝えた呼び方であると説明している。

なお、常陸の小貝が浜には、赤い小さな貝殻がたくさん打ち寄せられていて、その貝殻を拾ってきて、蚕棚近くに置くと豊蚕だといわれている。

※展示の金色姫の結末と違う話を掲載してあります。地域によって、結末が異なる話があるのです。

## 4．女性たちに支えられた養蚕

### 孵化は女性の仕事 ～掃立は子産みに通ず～

こうして養蚕は女性の仕事となるが、もちろん、一般の家庭では忙しい時には男性も手伝うことになる。しかし、孵化させることから二眠起きぐらいまでは、蚕も弱くこまごました様子の変化も見逃さないようにしなければならない。女性はまさに我が子を育てるように蚕育てをした。孵化させるときも、自分の体に種紙を巻き付けて体温で温めて孵化させたという事例もみられる。たとえば、能田多代子は青森県八戸での体験を以下のように報告している。

> 昔は蚕はケゴは、山桑ばかりで育ったから、桑の若芽が３枚くらいにのびるのを見計らって、掃き立ての準備をしたものであった。（中略）掃き立てには苦労をしたもので、その頃になれば私の家では祖母や母たちは、蚕種を柔らかな紙に包んで綿入れ着物を重ね着した背中に入れて暖めたものだった。蚕は日一日と色づいて、五六日もすれば卵の中で頭が黒く見えてきたが、そのときは擦れることを恐れて、背中から下ろし、トドコいたに入れた。下手に蚕種を背負うと傷めて蚕の量がなくなるので、夜分は夜具の間に入れたりして保温したものである。蚕箱に入れてからも生まれるまでにはかなりの温度を要したので、座敷の隅に六角屏風を立てて囲い、中に火鉢の二つも入れ、種は赤ケットなどで包み、炬燵櫓の上に上げたりして孵化するのを待った。これをムシケラカスといった。　（『日本民俗学』２　1953年８月）

また、春になると豊蚕を願う春駒などもやって来た。以下は伊那地方の事例であるが、この中にも女性が温めて孵化させたのではないか、と思える詞章が含まれている。

> 「こがいにとりては美濃の国や　尾張の国のおの山ぐちで　とめたる種はさてもよい種結構な種や　このよな種なら買いとめませう　買ひとめますればうけよろこんで　うけ喜んではほめよろこんで　右の袂に三日三夜　左の袂に三日三夜　両方合わせて六日六夜　ぬくとめ申せば三日に水もち　四日に青む　五日にさらりと出でたる種は・・・後略」　（下伊那郡）

> 「越前蚕種　かひめの女郎衆にお渡しあれば　かひめの女郎衆はうけ喜んで　袴たけなるあつ綿なんぞ　手にかひ、きりりとしたためこんで　右の袂に三日三夜　左の袂に三日三夜　両方合わせて六日六夜　あたため申せばぬくとめ申す　三日水ひき　四日に青む　五日にざらりと出でたる蚕・・・後略　（上伊那郡）

こうした女性の体温で温める習俗は、日本だけでなく中国にもみられ、清明節の頃になると嫁が蚕種を体に巻き付けて孵化させる報告や小説もみられる。

## コラム3　茅盾の春蚕に描かれる中国の養蚕

茅盾（ボウジュン　1896年7月～1981年3月　浙江省桐郷県烏鎮鎮）の『春蚕』（『秋収』『残冬』とともに農村三部作と言われる）には、穀雨のころになってもなかなか青まない蚕種をみて、舅の通宝が嫁の四大娘に体に巻き付けてあたため、孵化させてしまえと、暖めさせる場面が描かれている。『桐郷県志』にも同様の記述があり、余り特殊なことではなかったことが分る。

浙江省杭州市付近は中国の一大養蚕地帯であり、茅盾の生まれた烏鎮はそうした地域の中にある。しかも烏鎮は農村地帯の中にあってちょっとした町並を形成しており、養蚕時期の前になると街では養蚕道具などを売る市も開かれた。街の広場には簡易な劇場もあり（現在も存在している）、買い出しに来た近在の人々はそこで演じられる京劇などを楽しんで帰っていった。茅盾の春蚕はそうした一軒の農家の養蚕の姿を描き出している。また、人々は四月三日前後の清明節になると、湖西市にある含山寺の蚕神にお参りに行き、豊蚕を祈ってくる。寺の界隈では、着飾った若い娘たちが舞い踊ったり、闘拳を楽しんだり、寺の下の川では舟こぎ競争が行われたりしている。

浙江省含山寺

含山寺内蚕神

### 一夏終わると一貫目も痩せる

蚕は春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕と年に4回飼うところが多かった。『豊科町誌別編民俗Ⅱ』によれば、豊科では春蚕・春夏蚕・秋蚕・晩秋蚕・晩晩秋蚕・初冬蚕を飼った家もあるという。集落ごとに稚蚕所が出来て、二齢ぐらいまでを共同飼育するようなった第二次世界大戦後は、多少養蚕も手を抜けるようになったが、それまでは女性は常に気を引き締めてみていなくてはならなかった。

安曇野の養蚕の年間飼育スケジュールは初夏から初秋に集中している。この間に農作業もしなければならない。したがって、蚕の出ている間は家中が大変な期間を過ごすが、特に女性は飼育の中心的役割を担っているので大変だった。また、よく言われることだが、稚蚕からだんだんに大きくなってくると、蚕棚も増やしていかなければいけない。そうすると、家族の居場所が蚕に占領されるようになり、蚕棚の下で寝ていたなどということもままあった。春蚕から晩秋まで飼い終わった女性たちは1貫目（約4kg）も痩せた、という話はよく聞く話であった。もちろん、蚕を飼っていれば済むわけではなく、たいていの農家では稲作・麦作などとともに、畑に野菜なども作っていたので、それらの仕事は蚕の掃き立ての時期を見計らいながら、合間合間に仕事を入れていった。蚕が掃き立てられると、生き物はほっておけない。1日4

回ぐらいの給桑は、上簇するまでか欠かせない。朝5時ごろから夜は10時過ぎまでの、時間を見計らった給桑とその間に行わなければならない桑摘み作業は、まさに休む間もない労働を強いられたものであった。

四眠起きぐらいの蚕は桑の葉をむしゃむしゃ食べる。
蚕棚の近くにいるとその音がさわさわと聞こえる。

大きくなってくると、家じゅうで手伝う。

ヒキ拾い。拾い出した蚕は上簇具に入れて繭を作らせる。

## 5．当たりはずれは養蚕につきもの ～最終的には神頼み～

### 日本三大養蚕神社

日立市の蚕養神社・つくば市の蚕影山神社・神栖市の蚕霊神社の三社は日本三大養蚕神社といわれ、かつては安曇野のあたりからもそれぞれの神社にお参りに行ったという。養蚕は、良い種に恵まれ、陽気に恵まれ、良い桑があり、飼育の仕方に恵まれてこそ良い繭がとれる。しかし、いずれもその年の陽気など人力ではどうすることもできない要素も多い。したがって、最後は神頼みということになる。神力があるとされる神社には参詣の人々が集まった。その神社の多くには稚産霊命が蚕神としてまつられている。

神栖市　蚕霊神社豊浦

豊浦の蚕養神社は豊浦の浜に一番近い神社であるが、稚産霊命（わくむすびのかみのみこと）、宇気母智命（うけもちのみこと）、事代主命（ことしろぬしのみこと）の三柱を祭神とする。神社の入り口には以下（コラム）のような縁起が掲げられている。金色姫とのかかわりは見られず、稚産霊命が蠶養浜東沖磯（こがいはまひがしおきいそ）にお姿を現したとし、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の際にこの社にお参りして、勝利を得たという武運長久の神としての要素を強くもっていることが分る。金色姫の話を神社縁起として伝えているのは、神栖市の蚕霊神社である。蚕霊神社からほど近い星福寺では、桑の枝を右手に持った衣襲明神のお姿を刷り込んだお札を出していた。なお、各々の神社では、縁起とは別に、金色姫の話を伝えている。

日立市豊浦　蚕養神社
（稚産霊命・宇気母智命・事代主命）

つくば市蚕影山神社
（稚産霊命・埴山姫命・木花開耶姫）

## コラム４　日立市豊浦　蚕養神社縁起

縁起：その昔稚産霊命が、人皇第七代孝霊天皇の御代五年辛巳春二月初午の日に、蠶養浜東沖磯の上に御神影を現わされて、まことに貴いありがたい御神のお告げがありました。そこで当時の里人達は社を神路の森の、上子山に建て、日本最初蠶養の祖神として敬い奉ってきました。その浦を豊浦の水門といい、尊神の現れなされた所を蠶養浜といいます。第十二代景行天皇の御代四十年に日本武尊が、御東征の折に、上総から陸奥にお入りになられる時、御船を豊浦の港に繋ぎ蠶嶺の社に詣でて勝利を祈られました。三日三晩すぎて船で蝦夷の境に入られたところが、戦わないで蝦夷をことごとく平らげることができました。これは御神の助けによるものと思われます。日高見国より常陸を過ぎて甲斐に至りました。この時日本武尊は今の社地にうつしなされ、神領八十余郷を寄附奉るといいます。元禄五年三月徳川光圀はこの社を当国式外三十五社に列せられました。蠶養浜だけに出る神様の御心をくむ蠶生貝は、悪を除き穢れをはらい鼠を避けるといい伝えられているので、養蠶家はこれを蠶棚にかざると蠶にくせが入ることがないとして珍重しています。

## 6．安曇野に伝わる蚕神

現金収入としての価値も高かった蚕は、違蚕（いさん）になると大きな損失となるので、掃立から収繭まで無事飼育できるようにと、蚕神に豊蚕を祈願することが多かった。豊科の玄蕃稲荷（げんばいなり）では「玄蕃稲荷御神養蚕守護攸」と書かれたお札を出している。豊蚕の折には初午に繭団子を作って沢山供えたものという。

市内には蚕影様・蚕玉様・絹笠明神などの石造物の神様がみられ、養蚕が盛んだった時代には、それらの神様をお祭りし、豊蚕を祈っていたことが分る。

家によっては、日立の養蚕神社にお参りに行ってお札を受けてくる家もあったし、築北村の富蔵観音（とみくらかんのん）へお参りに行き、お札を受けてくる家もあったという。富蔵観音は馬をまつる観音様であるが、そこのお札を受けてくるというのも、蚕と馬の関係を思わせて興味深い。また、養蚕が盛んだった時代は、各地の稲荷神社が養蚕神として機能し、養蚕が衰退すると養蚕神としての機能も衰退した。

戸隠神社のネズミ除けお札

養蚕大明神（住吉山泉住院）

正真院お札

蚕室の一隅に祭られていた神棚

三郷　蚕神

三郷　蚕影山大神

修那羅峠石造物の中の蚕神

豊科

コラム5

# 養蚕は女の管掌
## 女性に課せられた禁忌・さまざまな言い伝え

蚕を飼う女性は清潔で物静かに心正しい人でなければならないと、さまざまな禁忌が伝えられている。

・家の中は清潔に、化粧をしてはいけない。
・強い匂いのするものを身に着けてはいけない。
・大声を出してはいけない
・蚕の棚のほうまで煙を回さないように（火をうまく焚かねばならない）

などのことは、ほぼ全国的に言われていたことである。

・ネズミ　鼠の害を恐れる為に、養蚕中は之をヨルノモノ、又はヨメサンと謂いました。ヘビ　是も前と同様の理由で、ナハと謂いました。今でも年をとった者の間には此忌詞がまだ行われています。（但馬養父郡大屋村）

・寒暖計のなかった頃は、蚕室へ着物を着て入って自分の体で温度を計り、着物やはんてんをぬげるような暖かさが良いとされていた。それが昔の蚕室の適温とされていたのである。（小川村小根山）

・蚕室では蚕は悪臭を嫌うと謂って、天井に山椒の木を吊るすこともあった。山椒の香でその悪い臭いを紛らわそうとしたのです。赤い色の品物を蚕室に入れることを嫌ったのは、白い物（即ち繭）をする（扱う）のだからという意味であったらしい。又笛を吹いてもよくないとも謂いましたが、其理由はもう不明であります。掃き立てが始まると、使ってはならぬ言葉がありました。例えば、シ（死）は蚕の死ぬことを極度に恐れた故に、此音の語を使わず、又蚕の死んだり黒くなったりするのをジサンと謂いました。（但馬養父郡大屋村）

・蚕児が四齢になるとフナダンゴ（船蚕団子）というを作って祝った。船蚕一枚は繭一枚に相当するといわれ、これだけで繭一斗の収穫があるのだそうである。（相州津久井郡）

・後産の下りない時はひっこ（山まゆのまゆ）をのませればよい。（岩手県紫波郡）

・武州南多摩郡由井村打越の弁天へも津久井地方から参詣したそうであるが、これも養蚕期中鼠害除けの祈願をしたらしく、此地方では屋内で蛇が鼠を追い回すのを見ても、これは弁天様が鼠を捕りに来たのであるとて、決して追い出さないのである。（相州津久井郡）

・すべて家族中に死者があった年には、養蚕期中は遠慮して、他家の蚕室へは入らないようにした。若し入ると違蚕するようなことがあるとて非常に忌まれた。（神奈川県津久井郡）

## コラム6　カイコの一生

カイコなど、ガやチョウの仲間の一生は、卵→幼虫→蛹（さなぎ）→成虫と変化していきます。カイコの場合、卵から孵化（ふか）した幼虫は、1齢（れい）幼虫から5齢幼虫まで脱皮（だっぴ）を繰り返して大きくなります。終齢（しゅうれい）幼虫のあとは蛹となり、10～14日ほどで羽化（うか）し成虫になります。成虫は羽化したその日に交尾し、メスは400～700ほどの卵を産んで一生を終えます。

一年を通して何回成虫になるかは、昆虫の種と生育環境によって異なります。日本のカイコは自然状態では年1～2回羽化します。春蚕（はるご）、夏蚕（なつご）、秋蚕（あきご）、晩秋蚕（ばんしゅうさん）、晩晩秋（ばんばんしゅう）と4～5回飼育することができるのは、人間が温度管理を行って孵化の時期をコントロールして発生させているためです。一方、天蚕をつくるヤママユは、地域にかかわらず年1回だけ羽化する年1化性です。（松田貴子）

カイコの幼虫

繭をつくり、蛹になる

羽化した成虫

## Ⅱ　天蚕とその習俗

### 1．山蚕起源

家蚕のように人に養われて大きくなって繭を作る蚕と共に、野に放たれて大きくなるいわゆる自分で育っていく自養（じよう）（こんな言葉があるかどうかはわからない）する蚕もいる。天蚕がそれであり、安曇野地方では一般にヤマコと呼ばれている。ヤマコを何時頃から飼育するようになったのかはよく分からないが、記録に残るものは天明年間のことと言われている。本格的に飼育されるようになったのは、江戸末期ごろのことで、松本藩領長尾組野沢村の庄屋　務臺与一衛門影邦・景満兄弟が残した『公私　年々雑事記』の1827（文政10）年の記述に「当年頃より、山蚕夥しく流行」したという。その前年には松本藩の高山充秀が『山蚕之養録』「山蚕養ひ様之事」を刊行し、種の扱いから飼育方法についての注意を記述したものが残されている。したがって、実際にはもっと早い時期から、山蚕は飼われていたのかもしれない。

明治4年6月19日にはチャールズ・ワーグマン（イギリス人　画家）が、有明の天蚕林視察に訪れ、天蚕林のスケッチ画を残している。

猿に食いちぎられた山蚕繭

山蚕のピークは明治30年ごろで、安曇野地方だけで

は足りずに栃木県・茨城県のくぬぎ林を借りて、出張飼育もしている。山蚕とともに柞蚕（さくさん）の飼育もおこない、加えて家蚕飼育もしており、欧米の絹の需要の増大に伴い、家蚕の糸と共に輸出品として珍重された。

しかし、山蚕は飼産に比べ病気に弱く、天敵の蟻や鳥害の被害も受け種付数30％を収繭されればよいといわれていた。家蚕は年に4～5回飼育が可能だが、山蚕は1化生なので、一回が違蚕となれば現金は入ってこない。家蚕の方が現金収入としては安定していたし、国策としても家蚕の白い生糸を奨励したので、山蚕は衰退した。

現在は天蚕振興会の会員など10人余の方々によって、飼育がされているが、山蚕の天敵である蟻や蜂・蛙などのほか、猿が繭の中の蛹を食べに来るようになり、せっかくできた繭が食いちぎられてしまったりしている。（前頁写真）

## 2．天蚕日記 2019

現在、10数軒の天蚕飼育家がいるが、そのうちの1軒を例にとって2019年の飼育状況をみておこう。

伐採されたクヌギ林

2018年の収繭が終わると、10月から11月中に天蚕林の伐採をして、翌年に備えクヌギの木を調える。かつては、取り残した繭をそのままつけておけば、来年孵化するといわれていたが、現在は病気の基になったりするので、必ず枝ごと伐ってしまう。枝はチップなどにして、圃場林のすみに積んでおく。

圃場林を焼く

3月20日ごろ、圃場林の野焼きをする。細菌や害虫などを駆除してくれるのだという。圃場の人が歩く部分と、圃場内のクヌギの木が植わっている部分をやく。火炎放射器のような道具を使う。

保護網を張る準備作業

４月半ば、山付けをするために圃場林に保護網を張る。これは圃場林に関わる人々が協働で互いの圃場に網をかける。

５月 10 日ごろ、種を種紙に糊付けし、５月半ばごろヤマヅケをする。種紙は細く切ってホッチキスで止めていく。ヤマヅケをすると、10 日前後で孵化し、ケゴがクヌギの若葉を食べ始める。

山蚕も４回の脱皮を繰り返し、５齢目に入って７日ほどで繭を作る。ヤマヅケ後、70 日前後で繭を作ることになる。繭はクヌギの葉を二枚ぐらいあわせて、その中に隠れるように作る。しかし、2019 年から猿の集団が来て繭を食いちぎり、蛹を食べていく被害が続出している。

ヤマヅケ作業

ヤマヅケするために種を貼り付けた紙の両面テープをはがす

葉っぱの下に回ってしゃこしゃこ食べる。
もうすぐ繭を作り始める。

きれいに完成した繭

蝶かご
卵を産ませるためにこの中に雌雄の蛾を入れる。交尾すると籠の外側に卵を産み付けるので、卵を外す作業を行う。

繭がしっかり硬くなったころ、葉に付いたままを収繭し、蛹を殺す処理をして出荷する。種を取る分はそのまま置き、繭からヤママユガが出てくるのを待つ。雄の方が早く、雌が遅いので雌が出てくるのを待って交尾させ、種を取る。

種は蝶籠とよぶ竹かごの中に雌雄を入れて、交尾させる。交尾後雌は竹かごの外側に卵を産みつける。種はかごからはずし、麻袋などに入れて涼しい場所で保存する。写真は種を保存する麻袋と、保存箱である。

山蚕の種袋（麻製）

山蚕種入れ

## 3．野蚕製品

イヤリングとコサージュ
黄緑に見えるのは福島県霊山町の繭で作ったイヤリング
向かって右は穂高天蚕センターの布で作ったイヤリング

有明紬で作成した名刺入れ・免許証入れ

天蚕糸を織り込んだ着物

## コラム7　絹糸（けんし）をつくる昆虫たち

「繭（まゆ）」とは昆虫が蛹（さなぎ）の期間に外敵や環境の変化から身を守るために、体内からタンパク質性の糸（絹糸（けんし））を出してつくる覆（おお）いのことです。絹糸を出して繭をつくる昆虫類は、野生では大変多くの種が存在します。もっとも多いのはガ（チョウ目）の仲間です。

安曇野にも生息しているクワコ
カイコよりも小さい

カイコはカイコガ科の野生種のクワコが、古代中国において人間によって家畜化されたと推定されています。クワコは日本、朝鮮半島、中国大陸などに分布していますが、染色体数や遺伝子の解析からも中国のクワコがカイコの起源であることが裏付けられています。カイコの幼虫は歩行力が弱く、成虫は飛翔能力がないなど、野外では生きていくことができません。

カイコ以外で繭から絹糸をとって利用するガの仲間は「野蚕（やさん）」と呼ばれ、アジアを中心に世界各地で古くから利用がみられます。天蚕糸をつくるヤママユは日本の代表的な野蚕で、中国東北部に分布するサクサン（柞蚕）、インドのタサールサン、ムガサン、インドやベトナムで飼育されるエリサンなどが知られています。いずれもヤママユガ科に属する昆虫たちです。

（松田貴子、写真：那須野雅好）

野生のヤママユ

## Ⅲ　養蚕が安曇野にもたらしたもの

家蚕も天蚕も含め、養蚕が盛んになるにつれて蚕種屋があちこちに起業し、県外からも買い付けに来る仲買人がいて、それらの人々を接待する料理屋や宿泊のための旅館なども繁昌した。また、種の送付などのために郵便局や銀行もでき、一日市場、豊科、穂高、明科などの町がにぎわった。

ムラを歩いて聞き取りをすると、蚕種を飼って、一財産築いたなどという話は、現在もきくことができる。大正三年に刊行された『信濃案内』には、穂高町の有名な蚕種屋として矢野惣吉、天柞蚕種を販売する矢野口惣十郎、その養子の英一、松嶋商店、赤沼新一郎、赤沼春蔵、青木勘平などの名前があげられている。蚕種屋はもちろん豊科・三郷などにもあり、それぞれが優良種を販売して、安曇の蚕種はいい繭がとれる、との評価を受けていた。風穴の存在と共に、烏川沿いの桑もそれに一役買っており、歩桑を育てている家もあって、松本からボテをしょって買いに来たという話も聞かれている。

蚕種の販売を活発にしたのは、篠ノ井線や大糸線の開通の影響も大きく、種屋の繁栄につながっていった。

蚕種製造業者看板

蚕種製造業者看板（裏面）

蚕種木版

氷を切り出して積み込んで冷蔵庫とし、蚕種を保存した。

一日市場駅付近の賑わい

繭の乾燥蔵（三郷）

往時をしのばせてくれる赤レンガ造りの土蔵。繭の集荷に使ったという。

大小の製糸家も誕生した

## コラム8　蚕の呼び方さまざま（方言）

○あみぶとう（奈良県十津川村）　○あとと（会津地方）　○いちとい（滋賀県あたり）
○いとうむし（沖縄）　○うすま（越後地方）　○おさなもの（京都市田辺あたり）
○おしなもんさま・ごごじょさま（富山地方）　○おしろさま・おしらさま（駿河地方）
○おしろさん（山梨）　○おぼこ・おぼこさま（南巨摩郡）　○きんこ（陸奥）
○けごじょ（鹿児島・宮崎）　○こもぜ（京都与謝郡）　○こなこなさま（八丈島・三宅島）
○しろさま（庄内地方）　○とどこ・とどっこ（秋田・青森・岩手）
○ひめこ（神奈川・千葉・兵庫播磨地方）　○ほぼさま（新潟県東頸城郡あたり）
○おかいこさま・おけーこさま（長野）


［参考文献］

1　上田守国『養蚕秘録』1803（享和3）年（『日本農書全集』35　1981年2月　農山漁村文化協会）　大日本蚕種改良社『春夏秋蚕新説』天章閣　1891（明治24）年などさまざまな養蚕指導書が出得ているので参照。
2　徳川光俊『蚕飼絹篩』1812（文化9）年（『日本農書全集』35　1981年2月　農山漁村文化協会）
3　南安曇教育会編『南安曇郡誌』　1923年
4　『有明村誌』　1923年
5　平瀬麦雨「信州の春駒」『郷土研究』第3巻第2号　1915年4月　向山武男　原田清「信州春駒唄二種」『民俗学』5－1　P21～28　1933年1月など
6　『古事記祝詞』日本古典文学大系　岩波書店　1955年6月
7　中島福男　解説　復刻『山繭養法秘伝抄注解』　1958年ごろ
8　向山雅重『続信濃民俗記』考古学叢書6　慶友社　1969年12月
9　竹内照夫　新釈漢文大系第27巻『礼記』上　明治書院　1971年4月
10　水上勉『有明物語』1973（昭和48）年4月　中央公論社　5～39Pの短編であり、初出は別冊文芸春秋（第89号）1964（昭和39）年である。
11　『長野県史　近世編』第5巻（一）中信地方　長野県史刊行会　1975年8月
12　布目順郎『養蚕の起源と古代絹』雄山閣　1979年
13　小島賢夫「有明地方の明治末期以降（1904年～以降）の天蚕業」『長野県　蚕糸学会誌』第3号　1982年12月
14　穂高北小学校郷土研究会『みどり色のまゆ―ぼくたちが調べたヤマコの一生』さ・ら・え書房　1986年4月
15　板橋春夫「山繭と鮫の魅入り伝承」『群馬歴史民俗』第15号　1994年3月
16　桐郷県〈桐郷県志〉編纂委員会『桐郷県志』（中国浙江省）1996年11月
17　小島憲之他校注『日本書紀②』新編日本古典文学全集3　小学館　1996年
18　網野善彦「日本中世の桑と養蚕」『歴史と民俗』神奈川大学日本常民文化研究所論集14　神奈川大学日本常民文化研究所編　平凡社　1997年9月
19　石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』　岩波文庫　1998年9月
20　松香光夫・栗林茂治・梅谷献二『アジアの昆虫資源－資源かと生産物の利用－』　財団法人農林統計協会　1998年10月
21　「三郷の養蚕とその特色」『三郷村誌Ⅱ』5巻民俗編　三郷村誌刊行会　2004年9月
22　倉石あつ子「蚕育てと女性―中国養蚕農家の事例から―」『跡見学園女子大学文化学科フォーラム』20号　2002年3月、「養蚕における女性の役割」『跡見学園女子大学紀要』第36号　2003年3月、「女性の養蚕から男性の養蚕へ」『跡見学園女子大学紀要』第39号2006年3月など参照。（以上は『女性民俗誌論』岩田書院に所収
23　佐野和子「山繭の飼育と伝承―群馬県の事例を中心として―」『群馬歴史民俗』　第28号　2007年3月
24　伴野豊「クワコの形質特性－蚕との比較研究を中心に－」『蚕糸・昆虫バイオテック』79(2)　2010年
25　川西祐一・伴野豊ほか「分子系統解析によるクワコの進化と日本裂創の地理的変動との関係－カイコのゲノム情報とクワコの多型から－」『蚕糸・昆虫バイオテック』79(2)　2010年
26　「野沢村庄屋日記」『三郷村誌Ⅱ』資料編　三郷村誌刊行会　2011年3月
27　三田村敏正『繭ハンドブック』　文一総合出版　2013年5月
28　倉石あつ子「信州における山蚕飼育の現状―衰退とその問題―」『長野県民俗の会会報』37　2014年3月


（倉石あつ子）


「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あした　№20」
編　集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　令和元年9月14日
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205長野県安曇野市豊科4289-8
TEL：0263-72-5672 / FAX：0263-72-7772
URL：http://azuminohaku.jp/